

モデルプログラム D-4 文化適応－文化的差異とステレオタイプ－

ねらい	文化的差異からステレオタイプ・偏見・差別が生み出されることの問題性について理解を深め、所属する学校・地域のマジョリティ（日本人児童生徒、教員）に当事者意識をもって理解を促すために、多文化共生教育に取り組むようになる。
対象	<input type="checkbox"/> 教師を目指す学生（教員養成課程他） <input type="checkbox"/> 日本語教育を学ぶ学生 <input checked="" type="checkbox"/> 現職日本語指導担当教員 <input checked="" type="checkbox"/> 現職一般教員 <input checked="" type="checkbox"/> 管理職 <input type="checkbox"/> 指導主事 <input type="checkbox"/> 日本語支援員／母語支援員
日本語指導・外国人児童生徒教育の経験	<input type="checkbox"/> 経験なし <input type="checkbox"/> 1年目 <input checked="" type="checkbox"/> 2-4年 <input checked="" type="checkbox"/> 5年-9年 <input checked="" type="checkbox"/> 10年以上
高めたい資質・能力	<input type="checkbox"/> 捉える力（子どもの実態把握） <input type="checkbox"/> 捉える力（社会的背景の理解） <input type="checkbox"/> 育む力（日本語・教科の力の育成） <input checked="" type="checkbox"/> 育む力（異文化間能力の涵養） <input checked="" type="checkbox"/> つなぐ力（学校作り） <input type="checkbox"/> つなぐ力（地域作り） <input checked="" type="checkbox"/> 変える／変わる力（多文化共生社会の実現） <input type="checkbox"/> 変える／変わる力（教師としての成長）
主な内容	D 文化適応 A外国人児童生徒等教育の課題
活動形態	<input type="checkbox"/> 講義型 <input checked="" type="checkbox"/> 活動型 <input type="checkbox"/> フィールド型 <input type="checkbox"/> 実習
時間	60分
流れ（・項目）	活動（◇活動の工夫）
1. ステレオタイプについて検討する。（10分） ・ステレオタイプ、偏見、差別（D） 2. 子どもたちに異文化をどう伝えるかを考える。（40分） ・ステレオタイプ、偏見、差別（D） ・共感と受容（D） ・多文化共生教育（A） 3. 多文化共生教育の実施方法について、具体的に検討する。（10分） ・対話（N） ・異文化の受容（N） ・自己肯定感（N）	1. 経験・事例を挙げてステレオタイプの問題性について理解を深める。 1) 自身の体験や外国人児童生徒等教育に関わる中で経験したことを挙げる。 ・海外でステレオタイプな見方をされた経験（「日本人は…」など） ・外国人児童生徒等に対する周囲の子どもの発言「～人は自己主張が強いから」等 2) 1)の例をもとに、ステレオタイプが、偏見や差別を生む恐れがあることを確認する。 2. 外国人児童生徒等への偏見や差別の事例について、問題の所在と解決方法について、検討する。 1) 文化的差異に対する偏見や差別の例（実際に経験したこと）を紹介し合う。 2) なぜ、偏見や差別が生まれたのか考える。 3) そうした事態を防ぐために何ができたか、アイデアを出し合う。 ◇受講者からは事例が挙がらない場合を想定して例を準備しておく。 （食生活の違い、身につけている装飾品、振る舞い方等。書籍等で紹介されている事例を提示してもよい。） 3. 話し合いの結果を踏まえ、自分の学校では、日本人児童生徒への教育（多文化共生教育）をどのように実施できるか、可能性を探る。 ・差異に戸惑い悩んでいる児童生徒と対話し、共感的に理解するように ・異なる言語・文化を、寛容な態度で受容し、関心をもつように ・一方的に同化を強いるのではなく、共に新たな文化を創り出せるように ・外国人児童生徒が自身の多様性を発揮し、周囲の児童生徒と協働して課題解決ができるように（多様性を肯定できるように）
備考	・30分程度で実施する場合は、講師が事例を挙げながら講義をする。 ・経験を有する教員を対象としたプログラムであるが、経験のない、或いは浅い教員を対象とする場合は、講師側が事例を用意すれば、1、2の活動を中心にして実施し、3については講師が講義をすることで実施は可能である。